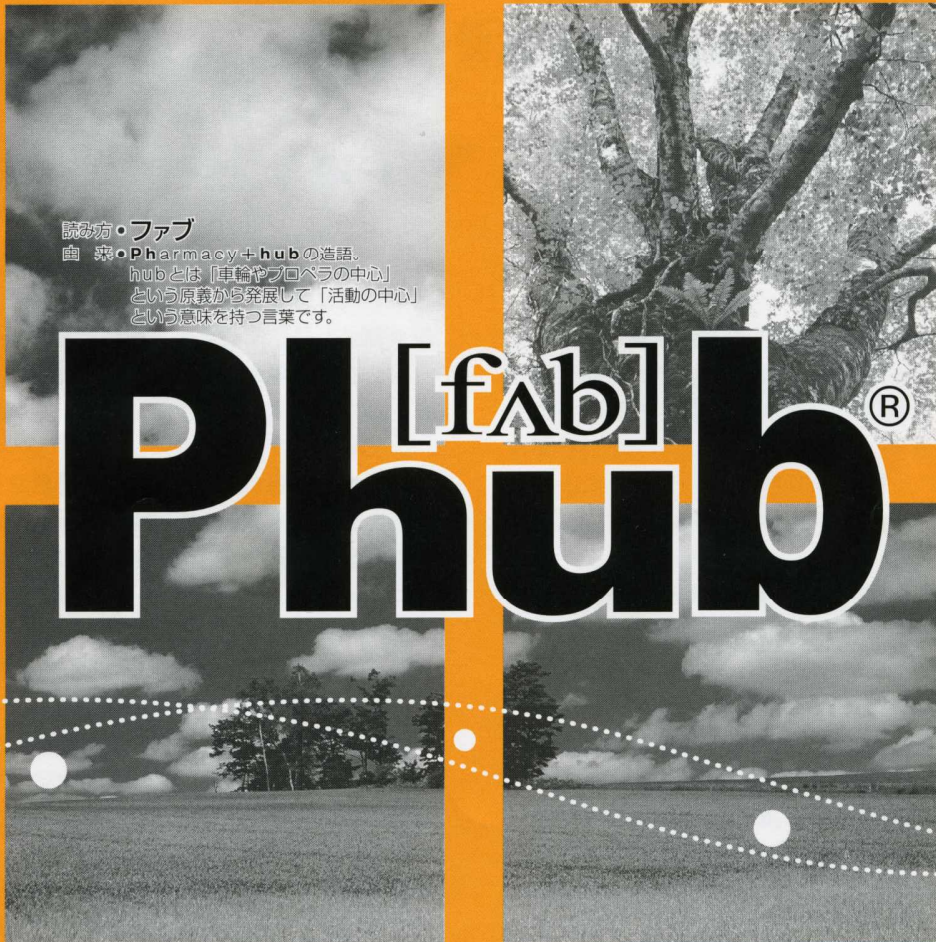


<http://www.e-mediceo.com>



読者方・ファブ
由 薬・Pharmacy+hubの造語。
hubとは「車輪やプロペラの中心」
という原義から発展して「活動の中心」
という意味を持つ言葉です。

Phub[®]

contents



時流

災害と薬剤師活動～新潟県中越地震の教訓を活かす～ 1～6

- 第1回 長岡市薬剤師会に学ぶ(1)
- 第2回 長岡市薬剤師会に学ぶ(2)
- 第3回 兵庫県病院薬剤師会に学ぶ



制度

混合診療が医療を変える 10～14

- 第1回 何故、混合診療なのか?
- 第2回 混合診療問題の合意内容と改革の方向性
- 第3回 混合診療拡大で予想される変化



健康

禁煙のススメ 6～9

- 第1回 COPD(慢性閉塞性肺疾患)とスパイロ検査
- 第2回 社団法人 日本看護協会の取り組み



経営

患者さんをファンに変えるEメールマーケティング 15～16

- 第1回 顧客との関係を良くするEメールマーケティング
- 第2回 薬局におけるEメールマーケティング

e-mediceo.com インフォメーション

～米国医療制度における薬剤師の役割と将来性～
第11回 米国薬剤師セミナー & 第11回 米国薬局経営セミナー 裏表紙裏

第1回 長岡市薬剤師会に学ぶ(1)

阪神淡路大震災から約10年経ちましたが、2004年10月に発生した新潟県中越地震は、まだ記憶に新しいところでしょう。最近も福岡県や千葉県で強い地震が観測され、日本が地震列島であることを再認識させられます。

今回は、中越地震の際に災害対策本部として地域支援の前線基地となった、社団法人長岡市薬剤師会取材し、災害時における薬剤師の役割や課題など貴重なお話をうかがいました。

●何をあいても安否の確認

2004年10月23日(土)午後5時56分、新潟県中越地方を最大震度7の大地震が襲いました。その後1時間あまりの間にも、大きな揺れを含んだ余震が断続的に続きました。

このような混乱と恐怖の中、地域住民の健康を守る使命がある薬剤師とはいえ、これを全うせよというのは酷なことです。

「真っ先に家族の安全を確認したのち、避難所で一夜を過ごしました。翌日は職場が無事なことを確認し、その後薬局のスタッフ、また25日に入り薬剤師会会員や職員の安否確認で奔走したような感じです。身近な人々の安全を確認し、そして業務に入りました」と、長岡市薬剤師会副会長 室橋正朋さんが説明します。



会長 佐藤宏之さん



副会長 室橋正朋さん

一方、長岡市薬剤師会会長の佐藤宏之さんは、地震発生当時、土曜で休日ということもあり、ご家族で小千谷市にいました。すぐに自宅へ向かいますが交通が寸断され動きが取れません。

また、携帯電話がなかなか繋がらないため連絡も取れず、焦りを感じて過ごされたそうです。結局、自宅にたどり着いたのは地震発生から3日後でした。

「携帯で連絡が取れないのでつらかったです。しかしこれは致し方ないことですので、例えば本部や主要な場所に無線を準備しておくなどの連絡手段を確保しておくことも、今後検討の余地があると思います」

お二人とも、災害時には何はともあれ安否確認が火急の要件だと声を揃えます。薬局として、災害時に利用できる確実な連絡網を確立しておくことが大事でしょう。

●震災による教訓

次に、各店舗単位の営業についてうかがいます。長岡市内では営業不能の被害を受けた薬局は1店舗でした。

「最も被害の大きかった小千谷市や川口町では、店舗そのものが倒壊という被害が多かったです」と、佐藤さん。「ですが自社薬局で言うと、OTCの瓶が割れていたり、本棚の書類が散乱してはありましたが、これは片付ければ済む範囲のものでした。在庫にも問題がなく、ほぼ通常通り処方せんを応需することができました」

「レセコンや分包機が故障していないかということも心配です。これらが機能しないと開店できませんから」とは、室橋さんの弁。「普段から備品の安全を図っておくのも重要かもしれません」

「機器はリースにしておくのも一つの手です」佐藤さんが補足します。「経費が割高になりますが、故障時にリース会社が補償してくれます」

佐藤さんが続けます。「あと、そのことで思ったのが店舗のセキュリティのこと。例えば入口のガラスが割れたら警備会社にすぐ通報が入るシステム。それからレセコンなどは誰でもアクセスできる状態ですから、個人情報保護の面からデータのセキュリティ強化の重要性も、今回の震災で考えさせられました」

普段では気がつかない面も、災害に遭遇するといろいろと教訓が見つかるようです。「私は夏の集中豪雨による水害も経験しておりました。だから緊急持ち出し品を整理しています。レセコンデータのバックアップのMO、ロープやビニールシートなどです。準備しておくと安心ですよ」

また、室橋さんは自家用車に山歩き用のシューズや

地図・飲料水をはじめ、多種の装備品を今でも積んでいるそうです。「女房には神経質すぎると言われますが…備えあれば、という感じです」

皆さんも、ぜひ普段から準備を心がけてはいかがでしょうか。「それから」と室橋さんが加えます。「よく、地震に備えて家具を補強しましょうという話を聞きますが、素人が安易に行った場合、かえって危険なことも考えられます。例えば棚の前面をスチールの扉で強化したつもりでも、震度6ともなると書庫自体が倒れる可能性もあって余計に危険と感じます。扉がなければ書類や本が散らばるだけで済みますから。やるなら耐震知識を持った専門家に頼んで、書庫の重量や壁面及び天井の強度も考慮し、徹底的にやるほうがより良いと考えます」

経験者ならではのご意見です。

●連携と人員の安全確保

心苦しく思いながらも薬局業務を他のスタッフに任せ、室橋さんが月曜日（3日目）に行ったのは市内にある基幹病院のFAXコーナーなどの確認です。FAXコーナーの職員の状況、各病院の院外処方せん発行状況、各薬局の応需状況などは混乱を極め、その調整には随分苦労されたようです。ある病院では外来をストップ、入院患者を別の病院に搬送したという情報もあり、病院側の被害もつかんでおく必要があったからです。

「それでも、会員の皆様のご協力により混乱は最小限に留まったと感じました。FAXコーナーの職員の安全確保に加え、処方せんを応需できなくなった薬局から別の薬局への振り分けなど、センター薬局を中心とした横の連携の大切さを痛感しました」室橋さんが言います。



今回訪れた長岡市の玄関JR長岡駅

また、個々の店舗での人員配備も難しいと佐藤さんと言います。余震が続き、家族を残して出勤となれば気が気でないのは当然でしょう。

「うちはチェーン薬局なので、出てこれないスタッフの代わりに県内の被害の少ない薬局から補充することでローテーションを回しました」

また、室橋さんは「弊社はいつでもスタッフが家に帰ることができるように、患者さんに迷惑のかからない範囲で業務を軽減しました。これによって収益にも影響が出るのですが、いつまた大きな余震が起きるかわからない状況の中では必要なことでした」

こうしてお二人は職場を離れ、薬剤師会の仕事に専念できたわけです。

そして10月25日夕刻、室橋さんの携帯に、新潟県薬剤師会会長からの連絡が入りました。長岡市薬剤師会のセンター薬局を、現地災害対策本部として使用したい旨の要請でした。室橋さんは即時に承諾の返事をしたそうです。

次回は、その対策本部とボランティアの皆さんの活動をご報告します。

災害に備えるワンポイントアドバイス

- 緊急連絡網を確立する
- 緊急持ち出し品を整理しておく
- 店舗のセキュリティを再確認する
- レセコンなどの備品はリース契約を検討する

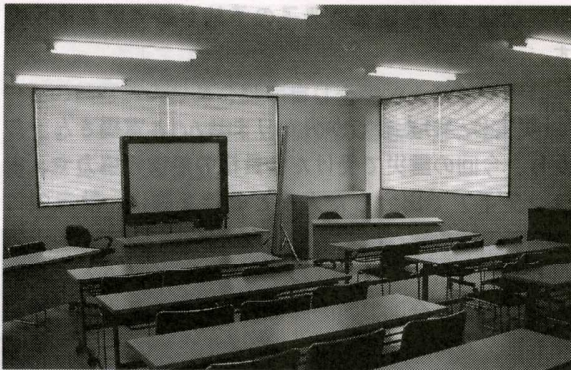
[2005年6月1日/Phub編集チーム]

第2回 長岡市薬剤師会に学ぶ(2)

今回は新潟県薬剤師会の要請を受け、長岡市薬剤師会センター薬局を現地災害対策本部として開放し、そこで活躍された新潟県薬剤師会の理事と全国から集まったボランティアの活動をご紹介します。

●薬剤師会の地震救援活動

長岡市薬剤師会館はJR長岡駅から車で5分ほどの場所にあります。センター薬局と呼ばれ、1階が備蓄センター、2階が会議室になっています。この2階建てのビルが、県薬の要請により災害対策本部となったのです。



センター薬局2Fの会議室

10月27日から入り始めた全国からの支援物資が、29日にはこの20畳ほどの広さの会議室から溢れるようになり、屋外にも積み上げておくほどになったそうです。県薬の理事の方たちが中心となり、ここで物資の仕分けを行い、ボランティアの方や会員が打ち合わせをし、避難所生活を送る被災者の皆さんへの支援をする拠点となりました。

●需要の把握

さて、対策本部が整備されたら各避難所での薬剤師の活動が始まります。お薬相談や物資の供給で苦勞された点とは？

長岡市薬剤師会会長の佐藤さんは、「何がどれだけ必要なかリアルタイムに把握できなかったこと」と述懐します。

後で統計を取れば、物資の需要傾向は明らかでした。

例えば、初日は外傷を負う方が多いので傷薬や消毒薬の需要が多く、2～3日後には風邪薬、または家の片付けなどの肉体労働をするため、湿布薬や痛み止めの需要が高まります。紙おむつや使い捨てカイロなど生活必需品は翌日からすぐに需要があったと思われま

す。しかしながらほとんどの人が初めての経験ですから、これらを事前に予測することが困難であることは致し方ないことです。

また、副会長の室橋さんは「いろいろなルートから物資が入るため、無駄な動きが多くなったことは否めません」と言います。行政、消防、薬剤師会、医師会、メーカー、卸など、温かい支援なのは確かですが、それらを上手く統括できていればもっと効率の良い支援になったと思われます。今後行政とより良い連携をとり続けることは、互いの力量が問われるところかもしれません。

また、支援物資の中には室橋さんが初めて目にする配置販売薬などもあり、戸惑いがあったと言います。

そこは薬剤師ですので、成分を見て対応されました。逆に、普段OTC専門の薬剤師の方は医療用医薬品の相談に乗ることができなかった可能性もあったようです。

「やはり、医療は常にそうなのですが、薬剤師もまた業態別専門家を集めたチームで動くことが理想でしょう」と室橋さん。

しかし、緊急時のこと。これらも教訓として活かせたら素晴らしいでしょう。

●ユニフォーム

支援活動での印象に残るエピソードを尋ねました。室橋さんは「杉並区薬剤師会の皆さんが着ていた、オレンジ色のライフジャケットが印象に残ります」と言います。3カ国語（日本語・英語・韓国語）で薬剤師の文字が入り、統一されたユニフォームは被災者からも識別しやすく安心感があります。

実は、長岡市薬剤師会でも、震災の1ヶ月前に災害用のヘルメットやユニフォームの準備という議題が挙げられたそうです。その時は先送りになりましたが、「まさか1ヶ月後に…」というのが、強く印象に残った要因だそうです。

白衣というのも、医療関係者というのが一目瞭然で決して悪くないと室橋さんは言います。1着は持参するべきですが、作業着という面では裾を引っ掛けたり汚れも目立ちやすいため、災害時のフットワークについては疑問だそうです。臨機応変に使い分けることが大切です。

また、避難所ではこちらから様子を尋ねて回るよりも、薬剤師の来訪をアナウンスなどで呼びかけてもらうほうが被災者も相談しやすいそうです。発生から1週間後にはボランティアの人数も増え、避難所に薬剤師が1名以上駐在することもでき、被災者の方々も安心だったことでしょう。もっとも、張り付いていた薬剤師にはお疲れ様の一言です。



今も残る長岡市の仮設住宅

●心のケア

地震でクローズアップされるのは人的・物的被害ですが、被災者の精神的被害も深刻です。特に中越地震では大きな余震が長く続き、精神的なダメージも大きかったのです。

そのため新潟県薬剤師会は、本部を解散するときに『お薬相談専用電話』というフリーダイヤルを設けました。対策本部がなくなった後も避難所生活を続ける人々のお薬相談を受けるための回線です。各避難所にこのフリーダイヤルのことを告知し、県薬と市薬のHPにも掲載しました。

「長岡市薬剤師会にはさほど緊急を要する相談はありませんでした。しかし、薬剤師という専門家が相談に乗ってくれるというだけで安心されるのでしょうか、短時間の会話をするだけというケースもありました」
このように、心のケアも重要だったのです。

最後に、薬剤師の災害支援活動を総括していただきました。

「なんといっても、会員の皆様の献身的なご協力に尽きます」室橋さんは真っ先に言います。「実は、今回の活動では長岡市薬剤師会からは会員へのボランティア要請を一切しなかったのです。ご自分の職場のこともある、何よりご自宅も心配でしょう。それなのに、たくさんの方にご協力いただきました。動き回っていると二次災害に遭遇する危険だってあるのです。それを顧みず…本当に、感謝の気持ちが尽きません」

医療人としての損得抜き、掛け値のない協力が室橋さんの一番の宝物となったと強調されます。

部外者としては僭越ですが、課題や困難もたくさんあったと思われます。しかし初めての経験ですから当然で、今後はどう活かすかが重要です。

「新潟県薬剤師会では今回の活動を冊子にまとめて、ボランティアに来てくださった全国の薬剤師会に贈呈する予定です」と佐藤さんは言います。すでに、鎌倉



今もアーケードに揺れる「がんばろう長岡!」の文字

市薬剤師会からはその冊子の予約が来ているそうです。

「災害は受けた者しか分かりません」と室橋さん。しかし、今回の震災で受けた会員様の無償の協力や、ボランティアで出会った人々との絆を胸に、熱意のこもった口調で取材にご協力いただきました。

全てはお伝えできませんでしたが、佐藤さんと室橋さんのお話が全国の薬剤師さんの今後の活動の一助になることを祈ります。

今回は阪神淡路大震災の経験を活かして中越地震でボランティアとして活躍された、兵庫県病院薬剤師会、播磨病院の西田先生、小野先生のお話をご紹介します。

[2005年6月8日/Phub編集チーム]

第3回 兵庫県病院薬剤師会に学ぶ

今回は新潟県中越地震に医療ボランティアとして参加された、兵庫県病院薬剤師会、石川島播磨重工業健康保険組合播磨病院の西田英之さん、小野達也さんのお話をうかがいます。

●ボランティアに臨む準備

西田さんと小野さんが中越地震の支援に参加することになったのは、兵庫県病院薬剤師会からの要請を受けたからです。2004年10月27日のことでした。

この要請は強制ではなく、むしろ相談に近いものだったそうです。しかし、お二人の出した答えはYES。阪神淡路大震災の経験者として中越地震被災者の方々に支援したいという、医療人としての純粋な使命感からでした。

まず、出発に向けて準備したのが「緊急車両扱い」の許可証手配。次に、薬剤師であることを示すために車に掲示するパウチ加工の各種掲示物を「手作り」で作成しました。

「阪神の時は2車線の43号線が片側規制され、緊急車両専用となったのを思い出しました。今回もそのような交通規制があると予想したのです」と小野さんが説明します。

また、西田さんは「兵庫県薬剤師会の顔写真入り身分証明書を首から提げるケースに入れました。腕章も作りました。被災地で活動するときにいちいち身分証明書を提示するのは時間の無駄ですし、一見して薬剤

師であることが分かってもらえれば被災者も安心です」

この顔写真入り身分証明書は全国でも兵庫県だけが用意しているそうです。大震災の経験が活かされた産物と言えるでしょう。



お二人手作りの掲示物や腕章、身分証明書など

このように車に掲示

準備が整い、29日（金）の夜、お二人は西田さんのパジェロで兵庫県の相市から約700km離れた新潟県に向けて出発しました。予想していた交通規制は少なく、わりと順調に、30日（土）の早朝には長岡市入りました。

●道なき道を行く『ハイパーレスキュー隊』

センター薬局で情報を仕入れ、物資やOTCを積み込むと、休む間もなく支援活動へ向かいました。被害の大きかった小千谷市や川口町の道なき道をお二人は進みます。「4駆の威力が発揮されたと思います」とお二人は声をそろえます。「阪神を都市型地震と呼ぶなら、今回は山間地型地震とでもいう感じでした」

二人が支援のターゲットに決めたのは、小学校や体育館などの避難所ではなく、自宅前やスーパーの駐車場、神社などで「自立」して避難生活を送っていた集団です。

「公的な避難所は医療チームがある程度配備されているので、さほどボランティアに困っていないはず」というのを経験からお二人は知っていたからです。

最初は、食料を仕入れに行ったコンビニの駐車場で、臨時的「お薬相談所」を開きました。苦情を言われるかと思いきや、最初の相談者となったのは当のコンビニの店長。風邪を引いて困っていたと大変感謝されたそうです。結局この場所で、20人以上のお薬相談を受けました。お薬相談には新潟県薬剤師会が用意したアンケート用紙を活用し、しっかりと問診をした後に適切なOTC等をお渡ししました。

また、堀之内の集落ではビニールハウスで避難生活をしているグループを発見。「何かお困りのことはないですか？」と積極的に声をかけました。さらに、「他にどこかで困っている方はいませんか？」と聞き込みを



コンビニでの臨時お薬相談所

し、次の場所へ支援に向かうといったアクティブな活動をされました。

「ある駐車場で避難生活をしている方から、〇〇町の知人に物を届けて欲しいという依頼まで受けたんです。宅配便もやりました」と小野さんは笑います。西田さんは「でも、我々は薬剤師だからと怒ったりはしません。ボランティアは見返りを求めるものではないのです。できることを探して、やる。それだけです」と淡々と答えます。

このお二人の大活躍を見て、山形県葉のあるボランティアの方がHPに印象的な書き込みをしています。

『(前略) 風貌、出で立ち、精神力、体力、知恵はまるでハイパーレスキュー隊のような活躍でした (後略)』



ボランティア活動中の西田さんと小野さんの勇姿

「私は普段から徹夜で山に入って釣りをしたり、山での生活は慣れっこですから」と西田さん。

「たまたまオレンジ色のフリースを着てましたから、オレンジ=レスキュー隊のイメージがあったのでしょう」と小野さん。

お二人はこう謙遜されますが、徹夜で新潟入りして自ら困っている人を探し出し、4駆で山道を掻き分ける姿はとても強烈なイメージだったに違いありません。まさしく、大震災経験者の精神的強みでしょう。

●ボランティアとは？

こうして土日の休日を充てたボランティア活動は終わりました。この間の費用は全て自費。当然、危険手当もありません。全国の病院薬剤師の中で、自費によるボランティア活動参加者は結果的にこのお二人だけでした(日薬や一般のボランティアは除く)。それでも、お二人はさも当然のように声をそろえます。

「それがボランティアの本質です。それに10年前、兵庫の我々が世話になっているのですから、そのお返しですよ」

西田さんと小野さんは、薬剤師としてのボランティア活動についてこうまとめます。

- 自分で探して行動を起こすことが大切。
- お礼を求めない、自己完結する。
- 支援を押し売りしに行くわけではないことを認識しておく。
- 自分で何をやりたいのかポリシーを持つこと。

「これは何も震災の時だけではありません。仕事は自分で探すもの。普段からそうですよね」と小野さんは言います。

「それから、記録を残すこと、後世に伝えることも重要です」と西田さんは付け加えます。今、西田さんは膨大な資料や写真を使い、いろいろな場所で講演活動を行ったり、取材を受けたりしているそうです。

このような災害は二度と起きて欲しくありませんが、残念ながら起きる可能性はあります。経験者の悲しみやご苦労は分かるはずありませんが、経験者が残した貴重な体験から得られたノウハウは、今後のために役立てて行きたいものです。

[2005年6月15日/Phub編集チーム]

取材協力

社団法人 長岡市薬剤師会

新潟県長岡市千歳2-9-12

URL: <http://www.5f.biglobe.ne.jp/yakuzaisi/>

会長: 佐藤宏之さん

副会長: 室橋正朋さん

石川島播磨重工業健康保険組合 播磨病院

兵庫県相生市旭3-5-15

薬剤科長 西田英之さん

薬剤科長代理 小野達也さん

健康 禁煙のススメ

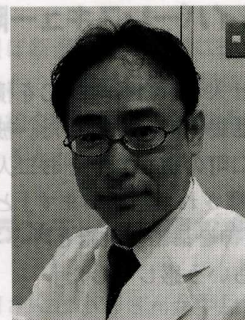
第1回 COPD(慢性閉塞性肺疾患)とスパイロ検査

禁煙後進国と言われる日本でも、ようやく禁煙に対する制度の整備や啓発情報の充実など、禁煙気運が高まっているようです。

今回は、別名たばこ病とも言われている「COPD(慢性閉塞性肺疾患)」を取り上げ、医師による専門解説とスパイロ検査についての情報をお届けします。

COPDとは？

Phub編集チームで唯一の喫煙者である記者に、スパイロメーターによる検査を受けてその記事を書く、という指令が下ったのは2005年初頭。本年度Phubの記事企画立案中のことでした。



阪井田 仁士先生

「禁煙のススメ」という記事企画で生の受診体験をする資格があるのは愛煙家の私だけ。ならば我が身を投げ出しても皆様の健康のためになる取材をしようと、重大な任務と期待(?)を背負い、この企画にご協力いただいたライフサイエンスクリニックを訪れたのでした。

では、検査体験記の前に、ライフサイエンスクリニックの阪井田 仁士先生に執筆いただいた、COPDについての解説をご紹介します。(以下、先生の解説文は囲みで表示)

1) COPDとは

臨床的には、肺機能検査における閉塞性換気障害(一秒量^(注1)、一秒率^(注2)の低下)を特徴とする疾患であり、気道の閉塞がその主な原因となっています。「完全には可逆的でない気流制限を特徴とする疾患である。気流制限は通常進行性で、有害な粒子やガスに対する肺の異常な炎症性反応と関連している。」と定義されます。慢性気管支炎や肺気腫といった疾患がこの範疇に入り、咳や痰、労作時の息切れなどが主な症状です。

(注1) 一秒量 息を深く吸い込んでから思い切り息を吐き出したとき、最初の一秒間で吐き出せる息の量。

(注2) 一秒率 肺活量に占める一秒量の割合。健康な人だと70%以上を示す。スパイロ検査で測定し、一秒率が70%以下の場合にはCOPDと診断する有力な根拠となる。